

パイデイア（そのⅧ）

——ギリシア文化を彩る理想の数々——

G・ハイエツト

村島義彦 訳

ソロン

アテナイにおけるポリス文化の創造者

アテナイの声はじめて耳にされたのは、前六百年頃のヘラスの合唱隊においてであった。その声は最初、他国の——わけても同族関係にあるイオニアの——メロデーを模倣しつつ、いささか洗練を加えたにすぎないとも思われたが、まもなく、それらを織り合わせてさらに高い調和へと導き、これが背景となつて、その音色はいっそう鮮明で堂々としたものになった。とはいえ、そうした天分は、一世紀のちにアイスキュロスの悲劇作品を生み出すまで、持てる力を十二分に活かし切つたとはみなしがたい。われわれはしかし、幸運なことに、それに先立つたこの声の業績を、たとえわずかにもせよ知っている。すなわちソロンの詩がそうなのだが、前六世紀から今日に伝えられているのは、わずかに、いくばくかの断片を数えるにすぎない。そうはいっても、このように残されたのは、むろん単なる偶然ではない。アテナイ国家がその自由な精神生活を謳歌していた数世紀にわたり、ソロンは、この文化の「かなめ」として広く崇められていた。少年たちは、就学の最初にかれの詩を暗唱

し、その詩は、法廷の代弁者や民会の演説者のあまたの口から、アテナイの市民精神の「魂」を古典的に表明したものととして繰り返して引用された。この詩の影響は、アテナイ帝国の力と栄光が翳りをみせるまで、いささかも止まなかつた。その後は、新しい時代の歴史家や文献学者の面々が、過去の栄光への抑えがたい郷愁に駆られて、残存する詩の断片を集めてしっかりと保存した。かれらは、詩の形をとつたソロンの告白を、歴史的事実を記した貴重な記録であると伏し拝んだのだつた。この告白は、ごく最近になつて、現代の学者からもそうした風に評価されている。ソロンの詩の断片がもしも生き残らなかつたなら、われわれは、どのような損失を蒙つていたのであろうか——この点をしばし考えてみよう。思うに、偉大なアッティカの悲劇作品における、そして実に、アテナイのあまねく精神生活における最も気高くて最も奇妙な特性——あらゆる芸術と思想に「国家」という発想が与えた強い靈感——など、ほとんど理解できなかったにちがいない。個々人の知的・芸術的な生活がそこから生まれて、そこへと帰っていく当のものは、まさに共同体を描いてないこと、そして、アテナイ国家は、そのメンバーの生活を——ひとりスパルタを除けば——肩を並べるものがない程にきびしく統制していたこ

と、こうした点は、アテナイの市民たちに心の底から了解されていた。スパルタはしかし、あらゆる面で高潔を求め、あまりにも共同生活に固執したから、個人意思が自由に発展するだけの余地を残さず、おまけに、変化する時流に合わせてそのエートス(氣質)を変えることのできない無能をいっそうさらけ出しながら、ゆっくりと石化化した。過去の遺物になっていった。これに対してイオニアのポリスは、新しい社会秩序を築き上げる原理そのものを「正義」の理想に見出した。と同時に、階級特権を廃止して全メンバーの自由を確立し、個々の市民に、その潜在能力を自由に發揮する機会を与えたのだった。このポリスはしかし、一般の人間本性にこれほど讓歩したとはいえず、押し寄せる新たな個々のエネルギーをひとつに束ねて、高次の努力に訴えつつ、共同体への奉仕と補強に役立てるような「能力」をしっかりと發展させるまでには至らなかった。ここにいう二つの契機、すなわち、国家の内部で新たに主権を手に入れた「法」の教育的強制力が徐々に目立つようになった事態と、イオニアの詩人たちに存分に楽しまれた会話と思考の大つびらな自由は、いまだ、単一の目的によって結び合わされてはいなかった。アテナイの文化は、ひたすら外に向かおうとする個人のエネルギーと、なるだけまとめ上げようとする国家の力を何とか折り合わせた最初の成果にはかならない。アテナイは、政治教育・知的教育という大きな恵沢をイオニアに負っていたものの、ひたすら遠心的にはたらくイオニアの開放主義と、ひたすら求心的にはたらくアテナイの構成的特質がもつ根本的な差なら、つねに容易に跡付けることができるだろう。ここにいう差は、教育と文化の分野でギリシア精神が最初にその顔を覗かせたのが、なぜアテナイであったかの理由をしっかりと説明してくれるにちがいない。ギリシアの最高度の政治思想は、ソロンからプラトン、トゥキクディデス、そしてデモステネスにいたるまで、いささかの例外もなく、すべ

らくアテナイの市民が成し遂げたものであった。それらは、あらゆる精神活動を共同体生活の下位に置いて、しかも、前者を後者の一部とするような国家であったから可能だったのである。

ソロンは、このような本当の意味でのアッティカ精神を體現した最初の人物で、しかも同時に、これを創り上げた最大の人物でもあった。アテナイの精神は、みずからの精神的諸力を類まれな調和に導いたから、おのずと偉大な成果を運命づけられてはいたのだが、もしも、これらの諸力を指図する創造的人物が早くから現われなかったなら、将来の歴史を造り上げるなど及びもつかなかったからである。偉大な人物を値踏みする際に有形の仕事に目をつける「実物主義」の歴史家たちは、ソロンを評価するにあたり、「セイサクティア(一種の徳政令)」というアテナイの制度を導き出した功績にもつばら着目した。けれども今、そのように狭く制度面に限定しないで広くギリシアの文化史全体に位置づけるなら、何よりも本質的なのは、あまねく国民の「政治的教師」として輝かしいソロンの業績が、実際の歴史的影響よりはるかに長い命脈を保って、当人を、今日においてすら掛け替えない人物にしている点にちがいない。これに目を向けると、かれを、わけても「詩人」と考えないわけにはいかない。かれの政治活動は、そこに漂う偉大な倫理感覚によって、単なる党派政治の域をはるかに超えたものとなっていたが、そうした活動の背後にある動機の数々は、当人の詩にそつと漏らされていた。すでに観察されたように、法の制定は、新しい市民感覚を造り上げるこの上なく偉大な力の一つにほかならず、ソロンの詩は、そうした真実をわけでも明瞭に照らし出してくれる。この詩がわれわれに特別な価値をもつのは、実に、法の非人格的な抽象性の背後にある立法家自身の精神的個性——ギリシア人にわけても鮮明に自覚された「法の教育力」を目に見える形に具体化した——が、これを介して見事に浮かび上がってくるか

らなのである。

地主貴族の力は、アテナイ以外のギリシアの各地ではもはや衰えるか、あるいは廃止されていたのだが、ソロンの生まれた古えのアッティカ国家（「アテナイ」）では、なおも強い支配権を失っていない。アテナイの「殺人に関する取り決め」を成文化する最初の試み——あまりの厳しさからその名を知られた「ドラコンの立法」——を介して、貴族階級の力は、損なわれるよりもいっそう強化され、ためにソロンの法律ですら、これの廃止など真剣に狙いはしなかった。ペイシストラトスの圧政が崩壊してのち、これは、クレイステネスの改革ではじめて一掃されたのだった。のちのアテナイに著しい、新しい事柄をあくことなく追い求める特質を思い浮かべるなら、エーゲ海を襲った社会不安と政治不安の大波が、なぜこれほど徹底してアッティカの広々とした沿岸部を壊し去ったのか、に改めて驚きの目を見開かないわけにはいかない。けれども、当時のアテナイは、まだ純粋な農業国であって、市民たちも、はるか彼方に旅して見聞を広め、さまざまな感化を柔軟に受け容れる——前四世紀にプラトンの描いた——「水夫たち」ではなかった。かれらは、いまだ保守的な農夫として土壌にしがみつき、ほとんど移動せず、祖先の宗教や道徳をひたすら固守していた。だからといって、下層階級は新しい社会的趨勢にあくまでも鈍感であった、などと思いついてはならない。試みにポイオティアを眺めてみよう。ここでは、ソロンに先立つ一世紀ばかり前、ヘシオドスが、民衆の不満を声高に叫んでいたが、封建体制はしかし、ギリシア民主制の全盛期までしっかりと生き残った。しかも民衆の不満は、上層階級のすぐれた知性が引き取らなければ、そして、賢くて野心的な貴族が立ち上がって大衆を導かなければ、とうてい思慮のある政治行為にまで転換されなかったにちがいない。大地を耕す農奴に近い人たちは、誇り高くてこよなく馬を愛する大地主連中の手がかつしり

と支配されていた。後者については、祝祭とか仲間の葬儀の席で軽快な二輪戦車を自在に操っている姿が、あまたの古い壺絵に目にできるのではないだろうか。かれらは、わがままな特権意識に駆られ、しかも、土地を持たない庶民を軽視する傲慢にも促されて、虐げられた民衆にやさかも耳を貸さず、ひたすら無慈悲な手を振り上げて止まなかった。そうした民衆の深い絶望は、ソロンの偉大なイアンボス詩に記述され、われわれの心に言いようのない感銘を刻み込んだ。

アテナイ貴族の文化は、どこまでもイオニア風であった。その芸術にしても、あるいは詩にしても、ともに血縁種族（「イオニア」）のすぐれたセンスと習わしによって形造られていた。イオニアの影響は、当然ながら、生活作法や理想の数々にまで及んでいて、ゆえにソロンは、法を制定してアジア的な虚飾や婦人連中の哀歌——その時まであらゆる貴族の送葬儀式の一部となっていた——を禁じるにあたって、一般庶民の感じるところに譲歩しないわけにはいかなかった。衣服や髪型や社会慣習の面でのアテナイの流行が、華美に流れるイオニアの習わしである「アルカイア・クリデー（古えの華麗）」を捨て去るためには、一世紀のちのペルシア軍の侵攻という未曾有の危機を待たなくてはならなかった（ペルシア軍の手で破壊されたアクロポリスの残骸から復元された古えの彫像は、そうした様式が具えていたアジア的な優美さを生き活きと伝えているし、ベルリン博物館の女神立像は、ソロンの時代の高慢なアッティカの婦人たちを今に彷彿させていた）。滔々と侵入するイオニアの精神が、それに伴って、有害と思われた多くの事柄をもたらししたのは言うまでもないが、最初にアテナイを駆り立てて精神的偉業にまで導いたのも、やはりイオニアの靈感であったのは否めない。そうした靈感を欠いたなら、貧しい人びとの強さを引き出した政治的動きも生じなかつたらうし、ソロンという偉大な指導者も生まれないうで、当人の内面におけるアッティカ精神とイオニア精

神の出会いもその混ざり合いも、おのずと起こらなかつたのではないだろうか。ソロンの詩が与えたのは、文化史におけるこの重要局面への紛うことなき古典的証拠であつて、その価値は、のちの歴史家たちの掘り出した細々した事実とか、当時のアテナイ美術の残存品などに比べてはるかに勝つていた。かれの詩の様式——エレジーとイアンボス——は、イオニアにその源を仰いでいる。かれが、当時のイオニアの詩人たちと親密に交流していたのは、コロポンのミムネルモスに語りかけた自身の詩からも明らかだろう。そこに用いられている詩の言語は、イオニア式とアッティカ式の混淆にほかならない。当時のアッティカ方言は、なおいまだ、気高い詩に用いるに不十分だつたからである。その詩に表明された思想も、いくぶんはイオニア的であつた。かれはしかし、借り受けたこれらにみずからの多くを混ぜ合わせ、偉大で新しい考えをたつぷりと生み出したが、そうした考えが自由に整えられ、ある程度は楽々と表明されたのも、イオニアの様式を借りてのことにほかならない。

ソロンの政治詩は、みずからの法律制定に先立つてはじまり、ペイシストラトスが僭主となつた直前のサラミスの征服にいたる、およそ半世紀にわたつて執筆されたが、完成されるや、ヘシオドスやテイルタイオスの時代に詩自体が具えていた高い教育的色調をただちに身にまとつた。それらはすべて、同胞市民に語りかけた激励にほかならず、そこには例外なく、祖国に対する真面目で燃えるような使命感があふれていた。アルキロコスからミムネルモスにいたるイオニアの詩を広く見渡して、これに見合う作品などほとんど見当たらない。あえて例外を挙げるなら、夷敵の侵攻という大危機に際して同胞のエペソスの民の誇りと愛国心にしきりに訴える、あのカリヌスの詩ぐらいであろうか。ソロンの政治詩はしかし、ホメロスの世界に著しいヒロイズムの精神に新たに訴えたものではない。それが声に出して訴えているのは、新しい情念であつた。

本当の意味での新時代はすべからず、人間の魂における「感情」という新たな領域を詩人たちに開示したからにほかならない。

これまでも眺めてきたように、人びとは、これらの世紀が味わたつた暴力的な社会革命や経済革命に戸惑いながらも、そしてまた、この世の善きものを求めて繰り広げられるお定まりの闘争に悩まされながらも、信賴するに足る「足場」をひたすらに求めて、ついにはこれを「正義」の理想に見出した。ヘシオドスは、実の弟の貪欲に激しく抵抗する中で、デイケー（正義）の女神に「どうか庇護したまえ」と訴えかけた最初の人物であつた。かれは、ヒュプリス（驕り）の呪いから社会を護つてくれる女神の力を褒め称えて、その席を、至高の統治者である大神ゼウスの玉座のかたわらに設けた。そして、敬虔なイメージの中身を荒削りなリアリズムで包みながら、一人の人物の罪が、都市全体にもたらす「正への呪い」の帰結——收穫の不毛、飢饉、疫病、流産、戦争、死など——をありありと描いたのだつた。これとは逆に、かれはまた、神からの祝福の陽光を浴びて歓喜の声を上げる「正しい都市」——田畑は肥沃で、婦人たちは夫によく似た子供をせつせと産み、平和と富が全土に溢れている——も描いていた。

ソロンもまた、みずからの政治信念のすべてを「デイケーの力」に基礎づけたのだが、そのデイケーの姿には、どことなくヘシオドスの特徴が漂つていた。ヘシオドスは、正義の理想を固く信賴していささかも揺るがなかつたが、この信賴は、自己の権利を追い求める下層階級の抗争を正当化して補強したから、おのずと、イオニアのポリスの社会闘争に影響を及ぼさないではいられなかつた。ソロンはしかし、こうした発想を再発見したわけではない。それらの発想は、いささかも再発見を必要とせず、かれは、これらを引き継いで見事に完成させたのである。ソロンもまた、正義は、神的な世界秩序の欠くべからざる一部であると確

信して疑わず、それゆえ、飽きることなくこう宣言した、最後に勝利を収めるのは、いつも、*ディケー*の力^レであったから、これを無視するなと出来ようはずもない、と。遅かれ早かれ、罰そのものは確実におとずれて、人間のヒュブリス（驕り）は、正義の設ける境界を踏み越えた報いをその身に蒙らなくてはならない。

ソロンは、こうした点を確信していたから、同胞市民に警告して、利得をめぐる盲目の怒りに駆られた争いにわが身をすり減らしてはならないと訴えた。かれは、あるうことか祖国が奈落に向けて突き進むのを目の当たりにし、この破滅を何とか食い止めようと腐心して、こう叫んでいる、「民衆を指導する任にある者たちは、その強欲に促されて、不正な仕方では肥え太りながらまるで意に介さない。かれらは、国家の財をも神殿の宝をも節約せずにひたすら浪費し、*ディケー*の敬うべき基盤にもならぬ敬意を払わない。この女神はしかし、たとえ黙ってはいても、過去のすべて・現在のすべてをみそなわして、時が来るとかならず罰をお下しになる」と。とはいえ、ソロンにおける罰の観念を吟味してみると、その理想とするところが、ヘシオドスの正義信仰にみる宗教的リアリズムといかに異なっているか、に気付かれるのではないだろうか。かれは、ヘシオドスと違って、疫病や飢饉などを神の罰とは考えない。かれの考える、*神の罰*は、あくまでも国家に内在した。あまねく正義の蹂躪は、社会有機体の乱れに直結したからである。罰された国家は、党派争いや内乱に悩まされ、市民たちは群れをなして暴力と不正しか眼中になく、おびただしい数の貧困者は、家を追い出され、借金のカタに奴隷となり、異国の地に売られていく……。このような国家規模の呪いを避けようと、たとえ自宅の最も秘密の片隅に潜り込んだにせよ、呪いは、「高い壁を跳び越えて」そこに潜む当の本人を見つけ出さずには措かない。

ここに挙げた偉大な警告は、言うまでもなく、ソロン本人が召喚され

てアテナイの「調停者」となる以前に書かれたものだが、それにしても、個々人が共同体の生活に関わり合わざるを得ない事情をこれ以上に活きと説得的に記述したものとすると、まず、いずこにも見当たらない。社会悪は、まさしく、*流行病*のようなもので、定められた都市のすべての人びとを襲い、ソロンも語るように、あらゆる都市を例外なく訪れて内乱と階級闘争を煽り立てて止まない。これは、予言的な映像などではなく、赤裸々な事実に基づいた政治家の診断であって、正義を踏み躪るのは共同体の生活を打ち壊すに等しい、という普遍的真理を客観的に述べ挙げた最初のものにほかならない。そしてソロンは、この発見を何とか納得してもらおうとしきりに熱弁をふるうのだった。「わたしの精神は、広くアテナイの人びとに、*これ*を告げ知らせるように、と命じるのだ」——このセリフをもって、不正とその社会的帰結をめぐる記述は締めくくられている。次いでソロンは、正しい都市と不正な都市をめぐるヘシオドスの対比図を思い出しながら、*エウノミア*（よき秩序）の栄光を感激豊かに記述しつつ、そのメッセージを終えるのである。ここにいうエウノミアは、かれの目からみると、*ディケー*によく似た一体の女神——ヘシオドスの『神々の系譜』では、双方が、*実の姉妹*と呼ばれている——であって、その力もやはり同じく内在的であった。とはいえその力は、ヘシオドスと違って、外的な恩恵、肥沃、物的な豊かさなどの形でなく、社会秩序全体の平和と調和という形で顕現した。

この箇所でも、さらには他の箇所でも、ソロンがはっきりと把握していたのは、社会生活の奥深い処で、*法*がしっかりと統治している、という観念であった。その場合に思い出されてしかるべきは、時を同じくしてイオニアでは、タレスやアナクシマン드로スなどのミレトスの自然哲学者たちが、大胆にも立場を転じて、自然の世界が生成・消滅を絶えず間なく繰り返す中に、*永遠の法*が認められる、という発想を奉じるに

いたった点ではないだろうか。ソロンも、かれらと同じく、自然と人間生活の歩みには内在的秩序が認められ、それゆえに、存在するものには固有の意味と本質的規範が具わっている、のを検証しようと激しく駆り立てられたのだった。かれは、自然界を統べる因果の法則をはつきりと推定し、これに対応する形で、社会秩序における法の支配を同じく明瞭に口にしていった。他の箇所にも、こう語られていたからである、「密雲から雪と雹が生まれ、雷は稲妻にしたがい、都市は、権力ある者の手で落ちぶれ、民衆は、無知ゆえに暴君として力をふるう」と。僭主制——貴族の一族やその長が、一般民衆の支持を背景として、他のあらゆる貴族たちを統治する体制——こそ、アッティカのエウパトリダイ(名門の士たち)に向けてソロンの予言した最も恐るべき危険にほかならない。エウパトリダイによる国家統治は何世紀にも及んだが、僭主政は、これのたちまの終焉を意味したからである。ソロンは、かれらを脅すにあたって、民主制が差し迫っているぞ、などと口にしなかつたが、これは、まことに意義深いと考えなくてはならない。一般大衆は、いまだに政治体験を十分に積んでおらず、ゆえに民主制は、はるか彼方にあつたからで、これが登場するのは、ペイシストラトスのような僭主たちの手で貴族制が落ちぶれて後のことであつた。

ソロンは、イオニアの科学的発想を、見本の型に持っていたから、かれ以前の誰よりも容易に、共同体の政治生活は特定の法にしたがう、という事実を確定することができた。かれは、そうした結論を導き出す格好の材料として、エーゲ海の両側に位置するあまたのギリシア都市の歴史を携えていた。それらの都市では、一世紀以上にわたって同じプロセスが、驚くほどの一様さで辿られていたからにはかならない。アテナイの政治的発展の開始はかなり遅かつたから、かれは、他国の歴史をみずからの予測に用立てることができ、このような教育的行為を介して、

不滅の名声を手に入れたのだった。とはいへ、前もつての予言にもかかわらず、アテナイもまた、僭主制の段階を経ないわけにはいかなかつたわけで、これも、人間本性のしからしめるところであろうか。

最初に警告を発してから、その洞察がきつちりと立証されて、ペイシストラトスという人物がみずからと家族のために絶対権力を奪い取るにいたるまで、ソロンの確信はどんどん高まっていたのだが、これは、現存する詩からも跡付けることができるだろう。そこには、こう記されていたからである、「みずからの弱さのゆえに罰を受けるにしても、神々を責めてはならない！ これらの連中が権力を委ねられて強大になつたのも、元はといえはお前たちのせいだ、そのツケとして恥ずべき隷属が味わわれているのだから」と。これらのセリフは、先に引用した警告風エレジーの冒頭部分を思い出させてくれるにちがいない。そこには、こう語られていたからである、「われわれの都市が減び去るのは、大神ゼウスの判決とか、神聖にして不死なる神々の協議などに因るのではない。パラサアテナは、この都市の誇るべき守護神としてその手をつねに差し伸べていたが、市民たちは、愚かしくも貪欲に駆られて、みずからの都市を滅ぼそうとしているのだから」と。この予言は、のちの詩でしっかりと立証された。ソロンは、迫りくる惨事を前もつて警告しておいたではないか、と語つて、この件に対するみずからの潔白を証明し、ならばそもそもその責任はどこにあつたか、という問題を提起する。双方の箇所では、ほとんど同じ言葉を用いて問題が提起され、ゆえに、当人の政治信条を構成する基本教義の一つが、ここで論じられているのは明らかだろう。それを今、現代語で表現するなら「責任」の問題となるだろうし、ギリシア語でそうするなら「人間はみずからの運命に参与している」といった問題になるだろうか。

このような問題が最初に提起されたのは、ホメロスの『オデュッセイ

『ア』の冒頭であった。すなわち——神々と人びとの父である大神ゼウスは、神々を召集して、人びとの不平がいかに不当であるかを申し述べた。人びとは、みずからの生活のあまねく不幸をすべからく天のせいだと罵って憚らなかつたからである。そこでゼウスは——ソロンが用いたのとほとんど同じ言葉で——こう主張した。みずからの愚かさによって災厄を倍加させた張本人は、当の人間自身であつて断じて神々ではない、と。ソロンの詩は、ホメロスの義神論（神がいかに正当であるかの弁明）を意識的に思い出させてくれるにちがいない。ギリシアにおける初期の宗教が教えるところでは、人間の不幸はすべからく、外的原因によるものであれ、はたまた当の本人の内的意思や衝動に基づくものであれ、いっそう高次の力を代行するゝ逃れる術のないアテーの手でもたらされた。『オデュッセイア』の著者が、天と地を支配する大神ゼウスの口から語らせた哲学的な考えは、これより後の倫理思想を代弁していたのではなかつたか。そこでは、神的なアテー——天から送られてくる不測かつ不可避な定め——と人間の責任——天からのゝ割り当て（＝定め）——以上に大きな不幸はすべからくこれに起因する——がはつきりと区分されていたからである。後者（＝責任の問題）の本質的特徴は、前もつて知つていながら、なおかつ害となる行為をわざと欲する点にあるだろう。健全な社会生活にゝ正義がいかんにか大切に、というソロンの動かざる信念がホメロスの義神論と合体し、これに新たな思想的深みを与えるのは、この地点においてなのである。

あまねく共同体はゝ内在の法で縛られている、という普遍的眞実を認めるなら、おのずと、あまねく人間は為すべき義務を携えた責任ある道徳的代行者である、と考へないわけにはいかない。それゆゑソロンの世界では、『イリアス』の世界に比べて、神々が恣意的に介入する余地ははるかに少なかつた。それを支配するのはゝ法であり、ホメロスの世

界で天の恩恵ないし刑罰とみられた多くの出来事が、つまるところ人間の意思に基づくとされたからである。結果として神々は、みずからの意思に等しいゝ道徳秩序を遂行して効果あらしめるだけの存在になり下がる。ソロンの時代、イオニアの詩人たちは、不幸という問題をかれに劣らず深く自覚していたものの、メランコリックなあきらめ以外に解決の道を提示できず、人間の避けがたい運命をひたすら嘆くのみであつた。けれどもソロンは、みずからの責任をしっかりと自覚して行為するように、と同胞の面々に呼びかける一方で、その政治的・道徳的な勇気を介してゝ生きた手本を示し、かれの勇氣は、アテナイ的な性格が具える無尽のエネルギーと道徳的眞剣さを物語る何よりの証拠と評されたのだつた。

ソロンは、大いに多忙な政治家である反面、まことに深い思想家でもあつた。完全な形で保存されたエレジー風のミューズへの偉大な祈りは、責任の問題をくり返して、この問題が、かれの思想中で最も重要であつたのをそつと漏らしている。そこでは、人間における内的努力と外的運命に向けた一般的反省の中心部に、この問題が顔を覗かせていて、ソロンの姿勢が基本の線でいかに宗教的であつたかを、その政治詩以上にはつきりと実証していた。このエレジーに靈感を吹き込んでゐるのは、古えの貴族的な道徳規則であつたが、そのような規則では——『オデュッセイア』からも、しかし主としてテオグニスやピンダロスからも知られるように——物的な豊かさや社会的特権が、伝統に則つて大きく強調されてゐた。しかるにエレジーでは、この規則が修正され、人間的な法と神的な正義に向けたソロンの深い信仰とも十分に調和するものとなつてゐる。たとえば第一節では、富の入手はゝ正しい仕方に基づくべきだと説かれて、生来の所有衝動がきびしく制限されているのである。すなわち——神々の手与えられる富のみが長続きする。不正と暴力に訴えて勝ち取られた富など、早い足を具えたアテーの到来を煽るにすぎない、

と。

ここに繰り返されているのは、詩全体のあまねく箇所と同じく、不正は、ほんの短期間なら大いに威も振えるだろうが、ディケーは、遅かれ早かれ必ずやってくる、という思想にほかならない。もつとも、「神の刑罰」は社会秩序に内在するといった、かれの政治詩で展開された発想はその影をひそめて、代わって登場しているのは「大神ゼウスの天罰」——春の嵐のように直ちに天下降る——という宗教イメージであった。すなわち、「それは、突如として雲を追い散らし、深い海を泡立て、田畑に急降下して、人の手で造り上げられた見事な成果を滅ぼし去る。次いでそれは、再び天に駆け上がり、日光は豊かな大地に降り注いで、空には雲一つない。これこそ、ゼウスの天罰にほかならず、それは、何ものも取り逃さない。直ちに償う者もいれば、遅れて償う者もいる。罪ある人間が罰を逃れたにしても、当人に代わって、罪のない子供たちや子孫が罰を受けることになる」。これこそは、一世紀のちにアッティカ悲劇を生み出した宗教教義の核にほかならない。

今やこの詩人は、もう一つのアテーともいうべき、人間の思いとか努力では逸らすことの叶わない「定め」に目を向ける。言うまでもなく、ソロンと時代を同じくする人たちは、人間の行為とか運命を考えるにあたり、それが、大きくは合理化され道徳化されていると捉えてはいたものの、天の正義が行き渡っているか否かについては、いまだに不信を拭い切れないでいた。ソロンは、こう口にして、「死すべきわれわれは、善人であれ悪人であれ、強く望んだら何でも手に入ると考えてしまふのだが、それもしかし、不運に見舞われるまでのことで、いざ見舞われると、とたんに不平を漏らして憚らない。病人なら快癒を願ひ、貧者なら富貴を願う。誰もが、あるいは航海商人、農夫、職人、詩人、予言者等々にふさわしい仕方で、それぞれに黄金と富を求めて止まない。け

れども予言者でさえ、差し迫る不幸は前もって知り得ても、避けるすべは心得ていないのだ」と。これらの考えは昔風に淡々と述べられているが、わけても際立っているのは、エレジーの第二部に登場する中心思想にちがいない。すなわち——あまねく人間の努力は、いかに熱烈で論理的にみえようと、基本的に、モイラ（運命）の手で「不確か」にされてしまう。なるほど、当の本人が招き寄せる悲惨なら（第二部も示すように）防げないこともなかるうが、このモイラのみは、あらかじめ分かっている防ぎも防ぎ手立てはなく、善人も悪人も区別せずに容赦なく襲い掛かってくる。どうした行為を欲するにせよ、それに成功できるか否かはあくまでも別物で、成功に向けて最善を尽くす人間ですら、時として身を滅ぼすこともあり、下手にはじめた人間でも、神に許されたなら、その愚かさの帰結を脱してしばしば繁栄を謳歌できる。人間行為にはすべからく「危険」がつきまとうのである……

欲することと行なわれたことがそれほど容易に連結するわけではない現実を、ソロンは十二分に認識していたけれども、それでも頑として、悪しき行為という結果に責任があるのは当の本人だ、と考えて譲らなかつた。エレジーの第二部は、それゆえかれの目には、第一部に矛盾していると思われる。かれは、最善を目ざす行為ですら成功しない場合がある、と信じつつも、だからといって、あきらめて活動を停止しなさい、などと説教しない。このような「あきらめと活動停止」は、実のところ、アモルゴスのセモニデスというイオニア詩人が至り着いた結論であつて、かれは、死すべき人間は、達成もおぼつかない夢のような目標にせつせと汗を流し、あまたの労苦をムダにしている、とか、わが身を捨て去つて、みずからの滅亡を盲目的に追及する営みから足を洗う代わりに、いらぬ世話と悲哀にその身をすり減らしている、などと不平を漏らしている。ソロン自身は、このようなアパシー（無感情）に反対する立場を、エ

レジーの終章部で鮮明に打ち出している。ひたすらに感傷的な人間サイドから、この世界を眺めるかわりに、かれが手にしたのは、まさしく客観的な観点——つまりは神の観点——であつて、ゆえに当人は、みずから対して、さらには聴衆に対してこう語ることができた。人間の目には、非合理と映るような事柄も、いつそう高次の目から眺めたなら、実のところ、理になつた正当性をもつていないのだからか、と。その内部にいかなる基準も目標もまるで具えていない——これこそ、あまねく人間の努力がひたすらに目ざす、富の本質にほかならない。ソロンの語るところに耳を傾けてみよう。最も裕福な人ですら、わが富を倍加しようと懸命に努めて、とどのつまり、この点を例証しているのだから、と。およそ人間の身で、あまねく願うところをすべからく満たせるような者など、そもそもいるのだろうか。これを実現しようとすれば、その手立てはただ一つしかないが、それは、とうてい人間の力の及ぶところではない。人間を益するのも神々なら、そうした益を再び奪い去るのも、やはり神々だったからである。大神ゼウスは、人間に償わせるべく、のぼせ上がらせる力を具えた悪霊（アテー）を送りつけたのだが、この悪霊は、今はある人間に取り憑いたかと思うと、次には別の人間に取り憑くといったあり方をひたすらに繰り返した。

この詩に盛られた思想の分析がなぜ必要であつたかという点、そこには、ソロンの社会道徳論が豊かに盛り込まれていたからである。当の詩に目を通して、事のあとで（ポスト・ファクトゥム）訴えられた立法行為の正当性に耳を傾けるなら、かれの政治行為がその宗教的理想といかに緊密に結びついていたか、がくつきりと浮かび上がってくるのではないだろうか。たとえば、個々人の避けがたい経済格差を釣り合わせて無効にするべく、神としてのモイラが導入されたとき、かれの宗教的道徳論は明らかに、みずからの政策を正当化していたからである。その行

為にしても言葉にしても、すべからくが指し示していたのは、かれの改革の主要目標が、過剰と不足、有り余る力と極端な無力、特権と隷属、等々の間に、正しい中庸を見出し出すことであつた点にちがいない。だからかれは、徹頭徹尾、国家の中のいずれの党派をも支持しなかつたが、双方はしかし——富裕派にせよ貧困派にせよ——実際にはソロンのおかげで、あるいはその力を維持し、あるいはその力を勝ち取つたのだ。印象深いイメージに訴えて繰り返し例示されるのは、かれの位置が、敵対する双方の「上位」というよりは「中間」にぶら下がつた、まことに危険この上ない点であつた。かれはしかし、こゝも理解していた。過酷なまでに公平無私な性格が発する霊妙な道徳的権威——これこそ、わたしの強さにほかならない、と。利己的野心に振り回される党派の領袖たちの姿は、かれの手で、ミルクからクリームを掬い取つたり、魚で満杯の網をたぐり寄せる振る舞い——いずれもアテナイの農夫や漁師には活き活きとリアルなイメージであつた——に準えられているが、みずからの姿勢のみは、お定まりのホメロス言語で記述されていた。当人の中でいかに強く、みずからの位置主義を奉じる英雄的勝者たちと痛感されていたかは、これによつても十分に偲ばれるにちがいない。今やかれは、いずれもが相手を打ち負かせないように、双方の党派に等しく盾をかまへながら、雨のごとくに槍の飛び交う中間地帯に恐れ気もなく足を踏み入れる、あるいは、狼のように、たけり狂つて取り囲む群れを噛み破りつつわが道を切り開いていく……。詩の中でわけても効果的なのは、人格の個人面が常にしっかりと顔を覗かせ、それゆえ第一人称で語られた箇所がちがいない。それは、「時の法廷を前にした」答弁からなる偉大なイアンボスでも、とりわけ輝かしい箇所であつた。あまねく政治発言の中で、この詩にまさる個人的なものなどまず見当たらないのだが、それも当然、ここには、活き活きしたイメージがごく自然に溢れかえり、

あらゆる人間に向けたソロンの同胞意識がまことに気前よく直情的に示され、共鳴する力がわけても強烈に響き渡っていた……

単なる「権力への渴望」をはるかに超えた高みにまで昇った偉大な政治家たちを見渡しても、まず、ソロン以上の人物など見たるものではない。かれは、立法家としての仕事をやり終えると、祖国を離れて長途の旅に赴いたが、こう言明して倦まなかった。わたしは——たいいていの人なら同じ立場に置かれるとそうしたように——みずからの地位を利用して巨万の富を蓄えたり、絶大な権力を誇る僭主になどならなかった、と。そしてかれは、あたたら好機を逸した「愚か者」と呼ばれるのを好んだ。歴史家のヘロドトスは、ソロンとクロイソスの会談というロマンにあふれた物語の中で、ソロンの報告する独立自尊をしつかりと裏付けている。この歴史家の言に耳を傾けると、賢者ソロンは、肝をつぶすほどの富に囲まれたアジアの専制君主（クロイソス）と語り合っても、みずからの確信をいささかも捨てなかつた。その確信とは、この地上に生きるどのような偉人であっても、みずからの農園で静かに暮らす素朴なアツティカの小農夫以上に幸福とはいえない、といったものであった。この農夫は、みずからと子供のために額に汗して日々のパンをせっせと稼ぎ、父としての義務・市民としての義務を生涯にわたって果たしながら、老年の入り口に差し掛かって祖国のために斃れ「榮譽の冠」を手にしたからである。このような物語の精神は、ひたすら土にしがみついたアテナイ人の保守気質と、「はるかに見聞を広めるために」彼方を旅するイオニア人の冒険精神が、独特の形で魅力的に混ざり合っただけで出来上がった。イオニア文化がどのようにアテナイの気質に侵入したか、については、喜ばしいことに、現存するソロンの非政治詩の断片からしつかりと跡付けることができるだろう。これらの断片は、まことに豊かな心の所産であったから、そうした心の持ち主（ソロン）は、みずからが賛美する同時

代人の口から「ギリシア七賢人の一人」と称されたのだった。

老齡の苦しみに不満を漏らし、六〇歳を越すと病氣も悲哀も味わないうで直ちに死にたいと訴えた詩人のミムネルモスに対して、ソロンは、しつかりと応答して有名な詩句をまとめたが、その中身は、わけても注目されてよいだろう。そこには、こう記されていた、「わたしに従うつもりなら、この箇所をまずは削除して、わたしを羨んだりしてはならない。もしかするともっと善い何かを考え付いているのではないか、などとね……。イオニアの夜泣き鶯（ミムネルモス）よ、お前の詩を書き直して、こう詠うがよい、「願わくば『死』というモイラ（運命）が、八〇歳までは追い付いてくれませんように」と。ミムネルモスの思想の源は、ひたすら自由なイオニア精神にあつて、この精神は、みずからの基準を用いて人生を評価し、人生がこれに添わなくなると、とたんに拒絶して憚らなかつた。このような品評は、しかしながら、とうていソロンの受け容れるところではない。かれには、アテナイ人の健全な活力と人生を豊かに楽しむ姿勢がしつかりと具わっていて、これ自体は、六〇歳を迎えると生存の苦痛と災厄が増すものだから、なるだけこの年齡を忌避したいといった過敏なメラニコリーに対する、まことに格好の敵対者であつた。ソロンは、「老齡＝苦痛に満ちた緩慢な死滅」などといささかも信じない。かれの目に映つた老齡は「緑の樹木」のようなものであつた。そこに蔵された抑えがたい活力は、年々歳々、新たな花を見事に開かせたからである。ゆえにかれは、誰からも嘆き悲しまれず無言のうちを迎える「静かな死」さえ拒絶する。死に際しては自分のために溜め息を漏らし熱い涙を流してもらいたい——友人仲間切に願うのは、これを措いてなかつた。ここでもソロンは、有名なイオニアの詩人アモルゴスのセモニデスに異を唱えていた。セモニデスの教えに従うなら、人生はあまりに短く、あまりにも苦痛と悲哀に溢れていたから、他者の死を

申うにも一日以上に及んではならなかった、からである。ソロンもやはり、人間生活については、セモニデスの口にした以上に「好ましい」などと信じないで、かつてはこゝも叫んでいた、「幸福な人間などいないのだ。太陽が目にする『死すべき存在』はすべて、ひたすらに惨めなのだから」と。そして、アルキロコスやその他のあまねくイオニア人と同じく、かれも、人生の不確かさを嘆いてこゝを眩いた、「不死なる神々の御心は、死すべき人間の目から完全に覆い隠されている」と。とはいえ、このような負の部分のすべても、人生からの贈り物——子供たちの成長、スポーツや狩猟の湧き上がる喜び、酒と歌の愉しみ、友情、官能的な恋の至福など——を味わい楽しむうれしさに比べるなら、はるかに及ばないだろう。味わい楽しむ力は、ソロンの目からみれば、金や銀、土地や馬に劣らない見事な「富」にはかならない。ハデス(冥界)に赴く際に大切なのは、どれだけ多く——金や銀、土地や馬——を所有していたかではなく、そうした善——味わい楽しむ力など——をどれだけ多く人生から与えられたか、であるのだから。完全な形で現存する「七の群」を扱ったかれの詩は、人間の生涯を七年毎に区分して、各々の年代に固有の働きを配分しているが、ここに満ち満ちているのは、「人生のリズム」に対する真にギリシア的な感覚にちがいない。というのも、ある年代はその他の年代に席を譲ることはできず、それぞれが固有の意味を携えながら互いに調和し合つて、とどのつまりは全体が、普遍的なリズムに則つて興亡をくり返していたからである。

一般生活の諸問題——たとえば政治問題など——へのソロンの対処を決定していたのは、「万物は生来の法に従う」といった、右にみたのと同じ新感覚にはかならない。かれは、みずからを表明するにあたり、ギリシアの格言に特有のぶつきら棒な率直さに訴えた。自然の事物なら、その把握もつねに簡単明瞭であつたけれども、「すべての中でわけても難し

い把握対象は、分別の「見えざる中庸」であつて、これのみが「万物の分限」に通じている」。こゝ口にする中で意図されていたのは、正しい基準(＝中庸と分限)を与え、これに翳してみずからの偉大さを測定させる、ことではなかつたか。中庸と分限という——ギリシアの倫理学で基本的に重要な——觀念から、ソロンとその同時代人がわけても強い関心を抱いた問題が浮かび上がってくる。すなわち、ここにいる人生の新たな規則(＝中庸と分限)を把握するには、内なる悟性をどのように用いればよいか・・・と。そうした「新たな規則」の本質は、とうてい言葉では定義できない。これを把握したいのなら、ソロンの言葉、その性格、その生活等々をひたすら共感的に研究する以外に道はない。一般大衆にとっては、自分たち用に定められた法に従うのみで十分かもしれないが、そうした法を定める側の人間なら、いっそう高次の「いまだ書かれざる基準」を必要としないわけにはいかない。そのような基準を見出すために用いられる特異能力は、ソロンによつて「ゲノーモシユネー(分別)」と名付けられている。これ自体が、つねに「グノーメー(洞察)」——より詳しくは真の洞察に加えて、それを行為に移す意志をも含んだ——を仄めかしていたからであつた。

ざつと以上を糸口として、ソロンの精神世界がいかに一体を成しているか、がよく理解されるにちがいない。このような一体性は、外から当人に与えられたのではなく、当人みずからの手で創り出されなくてはならなかつた。よく知られているように、正義と法の支配といった、ソロンの政治思想と宗教思想の焦点ともいふべき觀念は、すでにイオニアにおける馴染みであつたけれども、そこではしかし、いまだ詩という形で述べられていなかつたように思われる。イオニアの詩人たちの間ではるかに熱烈に口にされていたのは、抜け目のない実践的知恵と享樂的な個人主義といった、これとは別の思想的局面であつた。ソロン自身は、そうした

局面にも深い共感を抱いていたが、かれの思想の新機軸はやはり、イオニア哲学の二つの極を一緒にして、ひとつの全一体——かれの詩で完全に成就した——にまで仕上げた点に求められるにちがいない。外なる生活と内なる人格は、かれの中で稀にみる調和を見事に実現していたが、この調和は、その詩にしっかりと反映されていた。かれは、個人主義の方は退けたけれども、個々人の人格が要求するところは十分に了承していた。それどころか、そのような要求に倫理的根拠を与えた最初の人物こそ、かれにほかならない。ソロンは、公的な国家と私的な精神——あるいは共同体と個々人——を一つにまとめ、ゆえに「最初のアテナイ人」と呼ばれるにふさわしい。そうした一体化によって、すべての同胞たちが準拠してしかなるべき「基本型」が生み出されたからである。

訳者あとがき

はじめに紹介する和訳は、W・Jaeger, PAIDEIA — Die Formung des Griechischen Menschen の英訳として有名な G・Highet, PAIDEIA — the ideals of Greek culture —, Oxford, 1939 をテキストにしている。イエーガーを和訳する際に、独文特有の圧縮性と抽象性に本気で手こずっていたわたしは、この英訳の意識性と具体性にどれほど助けられたか分からない。ハイエットの英訳は、いわゆる訳本の域を超えて、それ自体が、見事に完結した一個の読み物であった。

大学における外書講読のテキストに、たまたまこれを選んだ経緯もあって、教室での講読に合わせて、あえて和訳をパソコンに入れてみたのだが、改めて読み返してみると、独文の原典訳とは違ったストーリーの滑らかさが目に付いて、比較の意味でも、思い切って『紀要』に投稿することにした。

同じ中身ながら、著者が変われば、こうも全体が「様変わり」するものだろうか。訳文自体が原典を超えることは、まず見られないものの、双方がしかし、限りなく接近する事態ならあながち皆無ともいえないだろう。そうした数少ない例外の一つが、ハイエットの英訳にちがいない。今回は、紙数の制約もあって、「ソロン・アテナイにおけるポリス文化の創造者」のみを掲載することにした。

(本学文学部非常勤講師)